京都新聞賞

感情

宮津市立府中小学校　六年　服部　のえ

私の地域には、「子ども安全見守り隊」という登下校の見守り活動をしてくださる方々がおられます。私たちの登校班は、その見守り隊さんの家の前を集合場所にしていて、みんなが集まるまで、家の前のベンチにこしをかけて待っていたり、一緒に話したりすることもあります。私が一年生のころからずっと毎日、登校のときに付いてあるいて来てくれていた見守り隊さんでした。

下校した後も一緒に話したり、私のお姉ちゃんや妹は、勉強を教えてもらったりしていました。夏休みのラジオ体操がない日には、一緒に散歩をしたりもしました。たくさん話をして、楽しかったな。たまにする散歩がうれしかったな。

以前、体を悪くされ見守り隊の活動を休んでおられる時期もあったそうです。でも、私が五年生のときに、また朝の集合の時だけですが、顔を出してくれるようになりました。

「おはよう。」

毎朝、にこっと笑って声をかけてくれました。

ところが、また体を悪くされ、今年、亡くなってしまいました。そのことを聞いた時には言葉が出ませんでした。そして、おどろきと悲しみがあふれるような、心に穴があくような、そんな感じになりました。

その見守り隊さんは、入院をされていましたが、私たちに会いたいという希望で退院をして来られたそうです。そのことを聞き、毎朝、縁側から部屋で寝ておられる見守り隊さんに、

「おはようございます！」

「行ってきます。」

と、みんなで声をかけてから登校していました。

すごく優しくて、私たちをよくほめてくれました。趣味のことで話をしたり、学校の様子を話したりもしてきました。そのことが、毎朝、私にとって心の支えになっていました。「よし。今日も一日がんばろう」と思わせてくれました。

亡くなったと聞いて、登校班のみんなと家族とで会いに行くことにしました。行く前に見守り隊さんあてに手紙を書きました。棺おけに入っておられるその方を見たとき、思い出があふれてきました。何も言えなくて、「ありがとうございました」と心の中でそっと強く言いました。悲しい気持ちでいっぱいだったけど、感謝の気持ちをどうしても伝えたかったです。

お葬式の日。式場に入って前を見ると、私たちとの思い出がたくさんかざってありました。もちろん、私たちだけではなく、その方のご家族との思い出もありました。いろんな思い出が動き出すような気持ちでした。私たちが、その方の回復を祈って折った千羽づるもかざられていてうれしかったです。最後まで私たちとの思い出を持っていてくれたことがうれしかったです。

「本当に、今までたくさんありがとうございました。たくさんほめてくれたり、話を聞いてくれたりしてとてもうれしかったです。今までおつかれ様でした。」

私は心の中でもう一度そう言いました。その方とはもう会えないけれど、きっと見守ってくれていると思います。そう思うと、がんばろうと思える気がします。きっと見守ってくれているから。

私の地域には、私たちを見守り励ましてくださる方々がおられます。登下校のときに、付きそって、一緒に話をする中に、心と心の通い合いがあります。私たちに温かい心を教えてくださっています。私は、この見守り隊さんとのことで、支えてもらっている地域の人たちとのことを考えるようになりました。

見守り隊さんとの出来事を通して、「感情」という二文字の本当

の意味が分かったように思いました。見守り隊さん、いつもありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

審査員からのメッセージ

登下校を支えてくれた「見守り隊さん」の優しさと教えが、今も心の道しるべとなっている。温かな記憶が情景とともに綴られ、読む者の胸に静かに響く。

京都新聞賞

多文化社会から学ぶ「個性」の在り方

京都市立洛北中学校　三年　曽利　羽琉

「個性あふれる」「十人十色」。これらは、学級目標を決める時に毎年のように候補にあがる言葉です。人権学習や道徳の授業を通して「個人の価値を尊ぶこと」を学び、それは私たちの中で「大切なこと」として刻まれてきました。

しかし、現実の学校生活に目を向けると、クラスの中で異彩を放つ個性は、悪目立ちする存在としていじりの対象になったり、誰かの「好きなこと」や「努力してきたこと」が軽んじられ、からかわれたりしている場面を毎日のように目にします。では、そのような状態から脱却するにはどうしたらよいのでしょうか。私は、実際に友達がからかわれてつらい思いをしていると打ち明けてくれた時、「得意なことを誇示しないようにすることが、その状況から抜け出すための最善の方法ではないか」と伝えてしまいました。しかし、それは友達の個性を封じる方が良いと言っていることと等しく、私の言葉が本当は友達を最も深く傷つけてしまったのではないかと思うと、強い後悔と罪悪感で胸がいっぱいになりました。

さらに、この構図は決して学校という小さな社会に限定されるものではありません。「個性を大切に。」誰もがそう教わり、理解しているはずの社会で、SNS上の誹謗中傷や、ジェンダー差別など個性を卑下する言動が見られることに大きな矛盾を感じていました。

こんな日常の中で、私は「個性が共生できる社会を実現するなんて難しい」と思っていました。そんな考えを一変してくれたのが、ニュージーランドでの経験です。

去年の夏、私は二週間の短期留学でニュージーランドへ行きました。ニュージーランドには、先住民族であるマオリや、ヨーロッパ系、近年ではアジア系の人々も多く移住しています。私は現地の語学学校に通い、様々な国から来ている留学生と一緒に授業を受けました。先生方は、マオリの言葉や文化に誇りを持って教えてくれました。そして、それ以上に、先生自身が留学生それぞれの出身国の文化を学ぼうとしてくださる姿勢が印象的でした。「kiaora＝マオリ語でこんにちはの意」と挨拶すると、「こんにちは！」と日本語で返してくれる。そこでは「異なるもの」を排除する雰囲気はなく、むしろ「違うからこそ面白い」「知りたい」と誰もが思っているようでした。そこでの「違い」は分断の種ではなく、学びや喜びの源として受け止められていたのです。

ニュージーランドの先生の「他者の違いを価値として捉える姿勢」に皆が感化され、様々な国の留学生一人ひとりが、互いをもっと知りたいと思い過ごした二週間。こんなに短い時間であっても、互いの個性をわかり合うことができるという体験は、私にとって初めてのことでした。一人ひとり違った個性があり、その個性がその人自身の魅力として輝いている「個性が共生できる社会」が実在することを知りました。

一方で、ニュージーランドと同じように様々な国からの移民を受け入れているアメリカでは、今でも差別が社会問題となっています。この根底には、移民に「アメリカ人らしくなること」を求めたという歴史があります。「同化」を求められた人々は、結果として自国文化を失い、同時に完全には同化しきれない居場所のなさを感じるようになります。そして、全員を同化させようとする社会では、少しの違いが大きく見え、差別を増幅することにつながってしまっていたのです。

同化を求めるアメリカと、違いを価値と捉えるニュージーランド。そんなニュージーランドでも移民への偏見などはあると聞きます。

しかし、小学校の間から、マオリの文化やアジア系文化を取り入れた教育などを通して、偏見を減らそうとする取り組みがされてい

ます。私が経験した「違いを尊重する姿勢」はその努力の一端といえるでしょう。

振り返ると、私が友達にかけてしまったのは、まさに「同化を求める」言葉だったと思います。そして、アメリカの歴史が示唆するように、その先にあるものは、その人の居場所を奪うような深刻な差別なのだと気づき、愕然としました。

「周りの目なんて気にせずに、自分の個性を大切にしてほしい。」稀有な個性を決して目立たないようにするのではなく、一つ一つの個性が輝けるようにするために、まずは私自身が、友達の個性を価値あるものとして大切にしていきたいと思います。実際に私がニュージーランドで感じたように、自分の個性を認めてもらえることの喜びは、他者の個性を知ろうとする原動力につながっていく。だからこそ、私から変わることで、きっと一人ひとりの個性が輝く彩り豊かな明るい社会はつくることができる。今はそう思えています。

審査員からのメッセージ

留学体験を通して個性と共生の在り方を見つめ直す。「同じように振る舞う」ことで失われる自分らしさに気づき、共に生きる社会を真摯に模索する作文。